

2014年度 活動報告



特定非営利活動法人
パルシック

はじめに	1
パレスチナ	2
1 ガザ地区での被災状況、食糧配布	2
2 医療品配布、毛布配布	3
スリランカ	4
1 大統領選挙の結果と今後	4
2 ムライティブ県コミュニティ復興支援	5
3 南部デニヤヤでの紅茶事業	6
4 サリー・リサイクル事業、養殖事業、ゲストハウス事業	7
東ティモール	8
1 東ティモールの状況、東ティモールの貿易統計の推移	8
2 コーヒー事業、コーヒー生産者の声	9
3 農村女性による経済活動支援	10
4 山間部農民の生計向上事業	11
マレーシア	12
1 マレーシアでの活動の意義、PIFWAの活動	12
2 女性グループ PIFWANITAによる食品加工事業	13
3 マングローブ植林ツアーの開催	13
東日本大震災復興支援	14
1 北上町の復興状況と住宅再建のこと	14
2 にっこり農園3年目、復興応援隊の活動	15
フェアトレード	16
広報	18
人と暮らしに会う旅	20

はじめに

2014年度も活動の広がりの中で多くの出会いを得て、パルシックは多くのことを学ばせていただきました。感謝とともに、この1年間の活動をご報告するに当たり、次の2点を特記します。

パルシックにとって2014年度の一番大きな出来事は、パレスチナ支援事業を開始したことでした。パレスチナ自治区ガザの人びとは7月7日から8月26日までの51日間、イスラエルによる爆撃にさらされました。2,133人におよぶ犠牲者の大半は民間人で、しかもそのうち500人（男子313人、女子187人）は15歳以下の子どもたちでした。学校や病院までが空爆にさらされているという報道に接し、何かしなければという思いに駆られ、パルシック理事会は8月に、緊急に何らかの行動を立ち上げることを合意しました。

負傷者は3,374人の子どもと410人の高齢者を含む1万1,100人、家が全壊したために長期にわたって避難を余儀なくされる人は10万8,000人にものぼりました。32あった病院のうち15の病院が被害を受けたため、怪我をしたり病気になったりした子どもたちや妊産婦などへの治療もままならない状態でした。8月に何とかしようとしてアラブ諸国やパレスチナのNGOと連絡をとり、相談をして、9月末にはジャパンプラットフォームの資金も得られることになって、パルシックは医薬品や食糧を送り届けることから支援を始めました。事業を開始して、パレスチナ自治区ガザの状況を知れば知るほど、同地の人びとが人間らしく、尊厳ある生活を営む最低限の権利も奪われていることを改めて認識し、パルシックとして何ができるのか、何をすべきなのかと考えさせられています。新しい事業の開始は日本国内でも、新しい人びととの出会いを生み、緊急の寄付のお願いに多くの方が応えてくださいました。心より感謝いたします。

2015年1月8日にはスリランカの大統領選挙が行われ、内戦を勝利に導いて以来、圧倒的な権力を誇っていたラージャパクサ大統領が野党統一候補のマイトリパラ・シリセーナ氏に敗れるという結果になりました。困難な状況のなかで変化を求め、実現したスリランカの人びとに脱帽です。内戦終結後、生きづらい状況のなかで生活を再建してきた北部の人びとにとって、良い変化がもたらされるかどうか、今後を見守りたいと考えています。同時に、パルシックとしても新たな、多文化共生のスリランカの国づくりに対応するように考えて行かなければなりません。

パルシック理事

井上 禮子

清水 研

鈴木 直喜

永田 洋子

中村 尚司

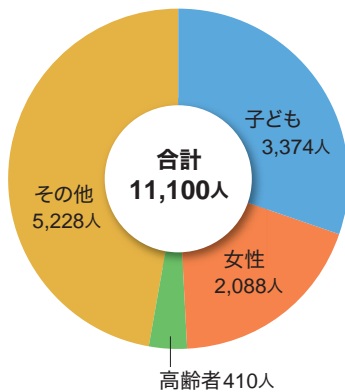
穂坂 光彦

ガザ地区での被災状況



2014年7月から8月にかけて、イスラエル軍がパレスチナ自治区のガザ地区を爆撃し、パレスチナ側で2,133人（うち市民は1,489人）、イスラエル側で71人（うち市民は4人）が亡くなり、第四次中東戦争以来最大の犠牲者数となりました。負傷者は合計1万1,100人にも達し、子どもや女性も多く含まれていました。また、負傷者の10%にあたる約1,000人は重傷で一生の障がいを負ったと報告されています。直接的な負傷はなくても、空爆や家族の喪失で心に傷を負い、メンタルケアが必要な子どもの数は37万3,000人にも上るとも伝えられています。

ガザ攻撃での負傷者数



一時、50万人にもものぼった避難民は、停戦後、徐々に自宅に戻り始めましたが、現在でも約10万人がガザ地区内で避難民となっています。ガザに通じる検問所の封鎖や、イスラエルによる水・電気の供給制限、検問所を通過する物資の厳しい制限も続いており、復興は全く進んでいません。

パルシックは停戦の成立直後から、緊急支援を開始しました。ヨルダンのアンマンと、パレスチナ自治区西岸地区のラマッラーに事務所を置き、日本人スタッフが駐在しています。西岸地区、ガザ地区ではそれぞれ現地出身のパレスチナ人スタッフも加わり、ともに事業を実施しています。まずは、最も緊急に必要とされた医薬品を医療施設に、食糧バスケットを被災した家族に届けました。

ガザ地区被災住民への緊急食糧・医療品配布

2014年9月29日から、ガザ地域の3つのパートナー団体とともに、食糧、医療品および毛布の配布を行いました。

食糧配布

パレスチナ西岸に本部を置く PARC（Palestinian Agriculture Relief Committee：パレスチナ農業復興委員会）と協力し、ガザ中部のデル・アルバラにて、特に被害が大きかったイスラエルとの国境沿いにある地域の貧しい世帯に対して食糧配布を行いました。

多くの世帯は3ヶ月に一度、国連等から、米や小麦、砂糖、調理油、塩等の基本的な食材が支給されていますが、生鮮食品の支給はなく、かつ食糧不足により野菜の値段が上がり、貧しい世帯にとっては、生鮮食品がなかなか手に入らない状況となっていました。そのため、特に要望が強かった生鮮食品の配布を3回行いました。

野菜や鶏等はガザの小規模農家から買い付け、寡婦などを中心とする女性組合がパッキング作業をして被災した人びとに届けました。こうすることによって、今回直接的に被害を受け食糧を受け取ることとなった被災者だけでなく、小規模生産者や寡婦の女性も裨益を受けられる仕組みとなっています。



この日の食糧は、トマト、ジャガイモ、タマネギ、ピーマン、鶏、オリーブ油、卵など



親と一緒に食糧を受け取りに来た子ども

【配布した食料品】 約1か月分の食糧（ジャガイモ、トマト、キュウリ、タマネギ、キャベツ、モロヘイヤ、鶏、オリーブ油、卵、タイム、スパイス）

【対象者】 貧困世帯合計933世帯、合計5,984人

【対象地域】 ガザ中部地区デル・アルバラのイスラエルとの国境沿いの住民

医療品配布

7月から8月にかけてのイスラエル軍による爆撃で、合計66か所の医療機関が被害を受け、約1万1000人が怪我をしました。ほとんどの医療機関が無料で怪我人の治療を行っていたなか、医薬品と医療関連品が非常に不足しました。パルシックは、UHCW（Union of Health Workers Committees：保険職員協会）とPMRS（Palestinian Medical Relief Society：パレスチナ医療救援協会）の2つの医療団体に医薬品、医療関連品及び医療機器購入の支援を行いました。

【配布内容】

- ・医薬品34点、医療関連品26点（使い捨てガーゼ、コットン、針、消毒用アルコール等）
- ・医療機器7点（デンタルユニット、医薬品保存機、診断セット等）
- ・医薬品68点（抗生物質、ビタミン剤等）

【配布数】

医薬品は、1ヶ月の診療に必要な約2,000名分を配布。
医療機器は7つ配布し、今後、毎月約1,000名の患者に使用予定。



医療機関で話を聞く現地スタッフ



毛布を受け取った子どもたち

毛布配布

復興が全く進んでおらず避難所生活では暖房器具や電力供給が不十分な中で、ガザの多くの人びとが寒さに苦しみ、1月上旬に中東地域を襲った寒気団により4人が凍死しました。

当初、毛布の配布は予定していませんでしたが、緊急に必要性が強かったため、PMRSの協力の下、特にイスラエルからの攻撃の被害が大きかった地域の仮設住宅に住む被災者に毛布の配布を行いました。なお、パルシックのWebサイトでこの緊急支援のお知らせをしたところ、たくさんの支援者からご寄付をいただきました。



仮設住宅の前に立つ子どもたち

配布エリア	世帯数	毛布の数
北部 ベイト・ハヌン BeitHanoun	96	252
北部 アルシュンジャイア Al-Shejaeya	116	307
南部 フzza Khuza	308	501
合計	520	1,060

（ガザ地区での緊急支援は、ジャパン・プラットフォームの助成を受けて実施しています。）

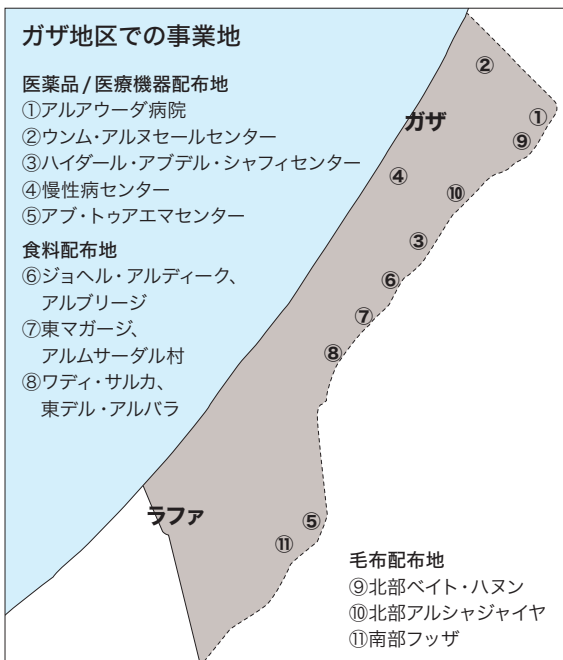
ガザ地区での事業地

医薬品/医療機器配布地

- ①アルアウダ病院
- ②ウム・アルヌセルセンター
- ③ハイダール・アブデル・シャフィセンター
- ④慢性病センター
- ⑤アブ・トゥアエマセンター

食料配布地

- ⑥ジョヘル・アルディーク、アルブリージ
- ⑦東マガージ、アルムサーダル村
- ⑧ワディ・サルカ、東デル・アルバラ



毛布配布地

- ⑨北部ベイト・ハヌン
- ⑩北部アルシュンジャイア
- ⑪南部フzza

たくさんのご寄付をありがとうございました

ガザでの緊急支援実施にあたり、Webサイト、新聞、イベントなどでご支援のお願いを呼び掛けました。支援に共感してくださったとてもたくさんの方から、多大なご寄付をいただきました。

このご支援金は、ガザでの毛布配布に既に使用させていただきました。今後もガザ地区での各事業に使わせていただきます。

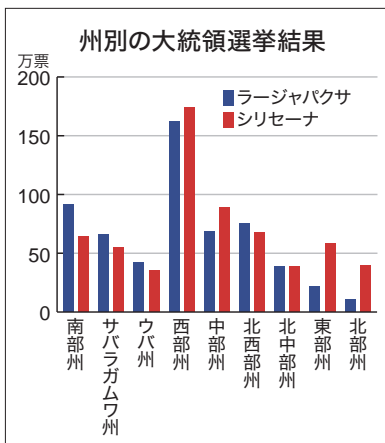
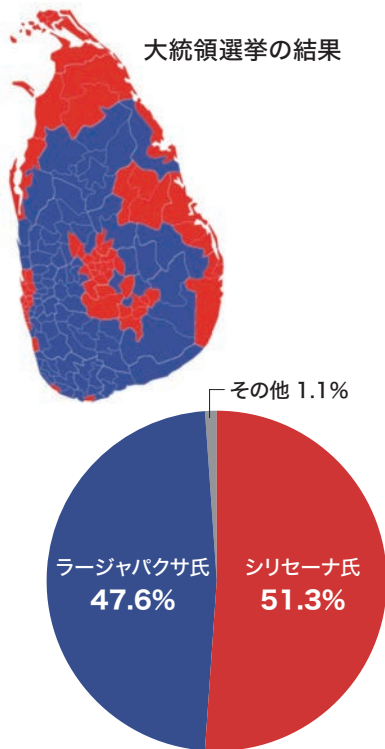
支援者数：193名

集まった寄付金：1,781,851円（2015年3月30日現在）



ぜひご支援、ご協力をお願いいたします。

大統領選挙の結果と今後



2015年1月8日、スリランカで大統領選挙が実施されました。現職で3期目を狙うマヒンダ・ラージャパクサ氏の当選が有力視されていたものの、投票の結果は、マヒンダ氏と同じ政党 SLFP の幹事長でラージャパクサ政権での保健大臣を務めたマイトリパーラ・シリセーナ氏が電撃的に野党統一候補として立候補を表明し、僅差で勝利を収めました。内戦を終結に導いたことで、2期目の2010年には多数派のシンハラ人を中心に支持率の高かったラージャパクサ政権ですが、親族による独裁政治や利益独占などを行う一方で、輸入物価の高騰、汚職の蔓延を招き、人びとからの不信感が高まっていました。

特に、今回の選挙結果は僅かな差で決まり、少数派のタミル人とムスリムの人たちの票が選挙の勝敗を分けるものとなりました。多数のタミルの市民を犠牲にする形で内戦を終結させたことや内戦後も民族融和を進める政策が実施されなかったために、政権発足時から北部のタミル人の間ではラージャパクサ政権への不信感と不人気が続いていました。他方、近年の仏教組織によるイスラム教徒への攻撃の後に適切な対応がとられなかったため、それまで政権への支持が高かったムスリム社会からのラージャパクサ政権への支持が下がっていました。その結果、少数派の両民族の人口が多い北東部でシリセーナ氏の支持票が大きく伸び、勝利につながりました。

省庁の改編と縮小、州知事や大臣の交代人事、関税の引き下げによる物価の引き下げ、公務員給与の引き上げなどを組閣後すぐに発表し、スピード感をもって政策転換に取り組むシリセーナ新大統領を、国内外の人びとは期待をもって見ています。また、言論統制を強く行っていたラージャパクサ政権が終わり、解放感を感じている人が多いとも言われています。

2015年4月以降に、スリランカ全土で国会議員選挙が行われる予定で、選挙の結果は、今後のシリセーナ政権の基盤が強固なものになるかどうかを占うものとなります。パルシックの事業地がある北部のタミル人の間では、大統領選挙の結果を手放しに喜ぶのではなく、総選挙の結果とその後政策がどのように変わっていくのかを見守っていこうと、冷静な反応が多く見られます。



マヒンダ氏への投票を呼び掛ける選挙ポスター(2014年12月キリノッチ県で撮影)：選挙対策に多額のお金が使われたが、勝利には結びつかなかった。

大統領選挙後のスリランカについての集会を開催



会場からの質問に答える登壇者の清水氏

2015年2月18日、御茶ノ水にある連合会館にて、緊急討論集会「大統領選挙とこれからのスリランカ」を開催しました。スリランカ情勢の専門家3名(清水研氏・パルシック理事、足羽與志子氏・一橋大学教授、中村尚志氏・パルシック理事)が各々の視点から大統領選挙までの経緯と今後の展望・課題について話しました。

当日、会場にはスリランカに関心を寄せる65名の方が足を運んでくださり、熱心に耳を傾けられました。パルシックでは、今後ともスリランカ社会の変化を発信するとともに、現地での事業実施を行っていきます。

1 ムライティブ県：コミュニティ復興支援

ムライティブ県でのコミュニティ復興支援事業2年目にあたる2014年度は、マリタイムパットゥ郡の3村でコミュニティセンターを建設すると同時に、今後実施する予定の養殖事業の基礎調査を行いました。

建設したコミュニティセンターには、村長の事務所が置かれ、センター内のホールでは村人を対象とした各種集会や、英語教室、子ども向けの塾などが実施されています。以前は仮に建てられた壁のない小屋や民家の一室を借りていた村長の事務所が、村の中心にある建物に移り、人びとが集まる場所らしい佇まいになりました。ホールは2005年1月に実施された大統領選挙の投票会場としても使われました。コミュニティセンターの運営は、各村の代表者で組織されたコミュニティセンター運営委員会によって維持管理されることになります。

センターで行われる子ども向けの塾や、子ども・女性を対象としたプログラムは、特にムライティブタウンから離れた地域でこれまで学校以外の教育の機会がなかった子どもたち、家にこもりがちだった女性たちにとって、貴重な学習、交流の機会となっています。

2015年度は、コミュニティ復興支援とともに、漁業を通じた村の人びとの生計向上と持続可能な漁業の発展をめざし、同郡での魚の販売所の建設、簡易的な養殖・蓄養の導入を行います。事業が始まった2013年当時は、まだ人びとが内戦中の避難先から村に戻り始めたばかりで、道路はどこも工事中で商店もほとんどなく、人びとの家は木材とトタン板で作った簡易的なものばかりでした。2年が経った今、道路が整備され、道端の小さな商店も増え、人びとの家はブロック作りで庭の草木や菜園もある景色に変わってきています。この暮らしがより安定し、安心した生活となるよう、2015年度も支援を継続します。

(ムライティブ事務所 伊藤文)



コクライ村でのコミュニティホールの完成式



(この事業は、日本 NGO 連携無償資金協力の助成を受けて実施しました。)

コミュニティ復興事業 (2013年3月～) 3年5か月間

解決すべき課題

- 内戦によるインフラの破壊
- 内戦によるコミュニティの崩壊
- 漁業者の不安定な収入

2013年度の成果

18基の井戸の完成で
124世帯の人々が生活用水を得られる

2014年度の成果

1. コミュニティホールの完成とホールでの各種プログラムの開始
2. 漁協の能力強化研修の実施

2015年度の活動

1. セリ場の建設後、漁協によるセリの開始
2. 養殖の開始
3. 漁民の収入向上

コミュニティホールでの子ども・女性向けクラスの実施

タミル人とシンハラ人、両民族の人びとが暮らすコクライ村では、村のキリスト教会の神父が中心となって、両民族の子どもたちが参加できるプログラムが行われています。神父は「若い世代の交流が未来の平和につながる」と、放課後の授業やダンスのレッスン、演劇教室など、様々な企画を用意して、交流の場を提供しています。村に戻ったばかりの頃はお互いに警戒していた子どもたちの間にも、最近は自然に会話が生まれるようになったそうです。

12月からは、村の女性を対象とした月に1回の講習も始めました。貧困や家庭内暴力、子どもの教育など、女性たちが日常的に直面している問題の一つひとつを取り上げ、問題に立ち向かう手助けをしています。参加者の一人スリクマリさんは「このプログラムが始まったことで女性たち間の交流の機会も増え参加するのが楽しい」と話しています。



女性向けの講習で発表する女性



学校で開催された環境セミナー



コンポストセンターのオープニングのテープカット

2 南部デニヤヤでの紅茶事業

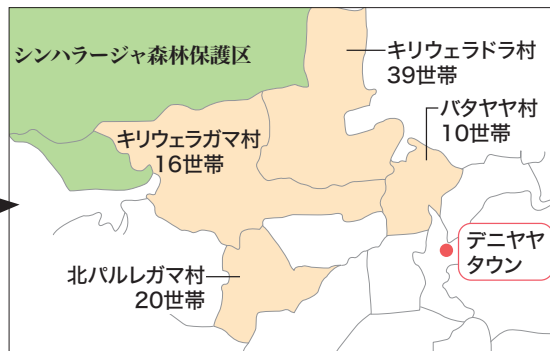
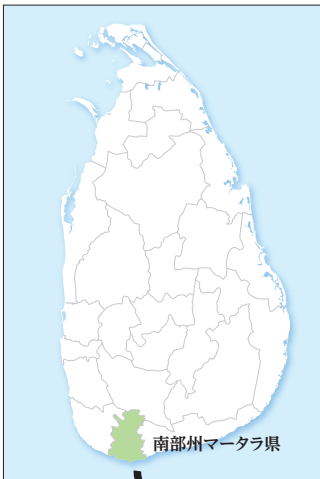
紅茶栽培の有機転換支援は事業開始から4年が経ちました。今年度はこれまでの実施地域に加え、少し離れたパルレガマ村でも開始し、40世帯の新規参加を目指しました。現在のところ20世帯の新たな参加が確定しており、残り20世帯からも参加希望を受け、各農家の圃場の確認作業を残すのみとなっています。

これまでエクサ（Eksath Karbonikka Tea Waga Karuwange Sangamaya = 有機紅茶の共同出荷グループ）のメンバーは、雌牛を飼ってその糞を利用してコンポストを自分で作るか、他のメンバーから購入するかして茶畑に施肥してきました。しかし、有機栽培には挑戦したいが牛の世話までは負担が大きいという農家や、牛の世話が難しくなったという農家が増えてきたため、効率的にコンポストを確保できるようにと集合的にコンポストを作るセンターの建設を9月から始めました。コンポスト・センターの建設は、主にクラウドファンディングのREADYFORでご支援いただいた52名の方からの寄付によって実現しました（p.18に詳細）。

他方で、紅茶農家の有機転換事業とともに、地域の子どもたちへの環境教育にも取り組み始めています。事業地の一つバタヤヤ村の学校の生徒約40名を対象に、学校の先生たちの協力を得て環境セミナーを実施しました。当日の講師はエクサのメンバーです。有機転換した畑と非有機の畑から持ってきた土を子供たちと一緒に観察し、色の違いや昆虫など土中の生き物の様子を比較しました。また、有機堆肥の作り方の実演も行いました。このセミナーに先立ち、エクサのメンバー有志が土壌の肥沃度や保水力、近隣の河川の水質を調査し、子どもたちに発表しました。今後も同地域の他の学校でも実施していく予定です。

（デニヤヤ事務所 高橋知里）

事業地地図



紅茶農家の声



ナンダティラカさん

2013年度に参加したいということで、相談を進めていたのですが、その頃ちょうど奥さんが妊娠して忙しくなり、参加をあきらめてしまった農家でした。しかし、やはり有機栽培への関心が強く、改めて今年度から参加することになりました。12月からは有機転換中の茶葉の出荷も始めています。ちなみに、女の子の赤ちゃんが生まれ、すくすく育っています！



ウバリさん

2012年度からの参加農家で、エクサの会計担当として、毎月の積立金の回収、管理、報告をしています。村のおじちゃんたちは普段から大きな声で話す人が多いのですが、ウバリさんはいつもニコニコして静かにしゃべる姿が印象的な人です。2014年度は茶畑の拡大も進めています。また、彼の奥さんも自分の茶畑を持っており、ウバリさんの取り組みに刺激され、2013年度から有機転換に挑戦中です。

3 サリー・リサイクル事業

2014年前半までは、比較的簡単な縫製技術で作れるデザインのブラウスや、ドレスなどを作ってきましたが、女性たちの技術力を向上させ、付加価値の高い製品を作ることでの収入向上を目指して、2014年後半からはプロのスリランカ人デザイナーによるデザイン開発と、女性たちを対象としたトレーニングを実施しました。10月に1回目、2015年1月に2回目、3月に3回目を実施し、ミシンがあまり得意ではない女性にも仕事を担ってもらえるように、刺繍やビーズなどの手作業の技術を中心に、製品を作る際に大事なサリーの色や素材の組み合わせについてなど、レクチャーを受けました。一方、イベント出店、コロombo市内の洋品店、観光地の土産物店での商品販売は継続して行いましたが、コロomboでの販路拡大には課題が残る一年でした。販路開拓が、次年度の大きな目標です。



デザイナーによる指導



研修を受ける女性たち

4 ジャフナ県での養殖事業

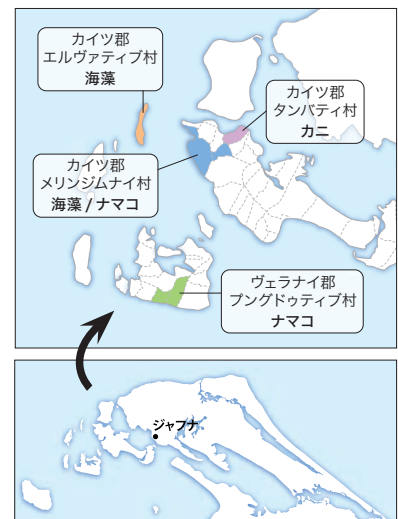
2013年度に引き続き、スリランカ国内での養殖業やジャフナ県内で実施されている取り組みの調査を行い、海藻、ナマコ、カニの3種類の養殖・蓄養を行うことに決定しました。ジャフナ県西側の島嶼部で、計4ヶ所の実施地を決め、海藻は2月から2ヶ所で試験的に栽培を始めました。粉末にして利用する加工用のもので、スリランカ国内の民間企業が技術の提供、販売を担当し、海外に輸出します。天候の変化や外部からの大型トロール漁船の影響で、ここ数年漁獲の減少に苦しむジャフナの沿岸漁民の中には、経験のない建築の日雇い労働で十分でない収入を補っている人も少なくありません。事業に参加する人たちは、この養殖を通して、慣れ親しんだ海から安定した収入が得られるようになることを期待しています。乱獲が進む現在の状況の中で、水産資源を守ることと育てる漁業の重要性を沿岸漁民に伝えるワークショップも実施しています。

(この事業は、三井物産環境基金の助成を受けて実施しました。)



海藻の育成状況を確認する漁民

ジャフナ県の養殖事業地



5 ジャフナ事業部門の進捗——ゲストハウスの開業

2013年9月にジャフナ事業の企業部門、KAIS (KAIはタミル語で「手」の意) を設立し、2014年に本格的に営業を始めてから1年が経ちました。8月にはジャフナタウンにゲストハウスを開店し、スタッフの知り合いや、日本からの訪問者の方々から少しずつ顧客を広げています。宿泊者からの評判は良く、特に木々に囲まれた静かな環境と調理担当スタッフが作る美味しいジャフナ料理が好評です。内戦終結後、30年間の遅れを取り戻そうとするかのように、急速に社会の変化と街の発展が進むジャフナで、昔ながらの伝統や文化を残しつつ、ジャフナの街への訪問者を呼び戻す一助となることを目指しています。内戦の影響を受けた女性たちが作る乾燥魚の販売もこのKAISが担っており、ジャフナの人びとの暮らしを支える社会企業として経営を維持できるよう、スタッフたちが収支計画づくりや広報に試行錯誤を続けています。



KAISゲストハウスの緑に囲まれたエントランス



アラウジョ新内閣の顔ぶれ

東ティモール国民議会での各政党の議席数

CNRT (東ティモール再建国民会議)	30
フレテリン (東ティモール独立革命戦線)	25
民主党	8
フレンティ・ムダンサ (改革戦線)	2
定数	65



店頭で売られる国旗の入った帽子



広場で遊ぶ子どもたち

東ティモールの状況

2012年に第二次シャナナ・グスマオン内閣が発足してから、戦略的国家開発計画（2011～2030年）の実現に向けて、ディリ国際空港の拡張計画、オエクシ経済特別区事業、ティモール海油田からのパイプラインを東ティモールへ引くための南海岸開発計画など、いくつもの大事業が具体的な準備にはいりませんでした。多額予算を投じた事業が動き始める一方で、閣僚の汚職問題がつづき、2014年はシャナナ首相の辞任予告で幕を開けました。

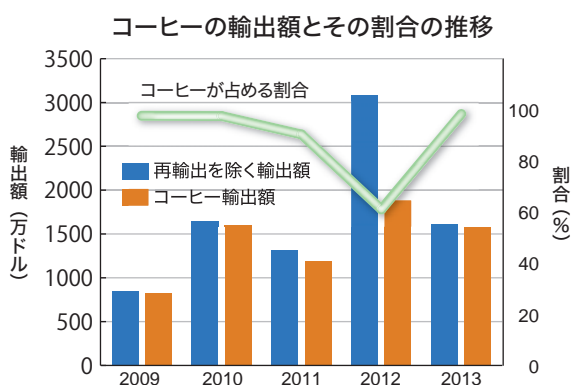
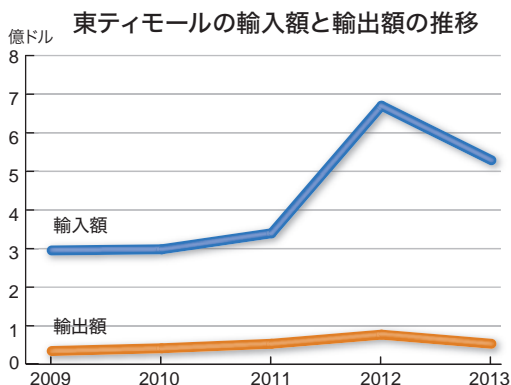
2014年8月に開かれたCNRT党大会で、シャナナ首相はあらためて辞任の意思を宣言し、その様子はテレビやラジオで中継されました。独立闘争時代のリーダーたちから次世代へどのように東ティモールの政治を引き継いでいくか、という切実な問題を説くシャナナ代表に対し、党員は「マウン・ボート（兄貴）！辞めてくれるな」の一斉コール。辞任はしない、しかし内閣を改造する、という苦悩の宣言で党大会は終了しました。

2015年1月30日、シャナナ首相から大臣たちへの解任通達が出され、2月16日に新内閣が発足しました。しかしその間、2月6日にはシャナナ首相の辞任表明がタウル・マタン・ルアク大統領によって受理されており、シャナナは内閣改造をしつつ辞任もしてしまいました。新内閣を率いるのは2002年の独立時、保健大臣を務めたルイ・マリア・アラウジョ医師で、野党フレテリンからの選出です。次世代がシャナナ率いるCNRTでも連合を組む民主党からでもなく、野党から選ばれたというのは皮肉でもあり、若い政治家を育てきれない東ティモールの実情を反映してもいます。

シャナナ自身は開発計画大臣に就き、首相の下にはCNRT、民主党、フレテリンから選出された調整大臣が4名もサポートにつきますが、全体では55閣僚を35閣僚に減らしました。地場産業の育成や地域経済の発展に課題を残し、民衆と富裕層の乖離が激しさを増すなか、新政権は開発計画を地方部にまで広げて実施していきます。政治が混乱なく歩み寄りを見せたという今回の政権交代が、真に民衆のための一歩となることを期待します。

東ティモールの貿易統計の推移

東ティモール経済は大きく石油関連収入に依存しており、石油外経済では、輸入が輸出を大きく上回っています。石油関係以外の産業が育っていないなか、再輸出を除く輸出産品にコーヒーが占める割合は98%（2013年）に上り、コーヒーが東ティモール経済にとって重要な輸出作物であることが分かります。



(出典) Timor Leste, External Trade Statistics 2013

1 コーヒー事業——品質管理の強化に取り組んだ一年

2014年はコーヒー豊作の年でした。マウベシコーヒー生産者協同組合(COCAMAU)の収量見込みはパーチメントで前年比2.7倍の320トン(生豆で240トン)。一方で、2013年のコーヒーについて品質に改善の余地があることが分かりました。そこで、今年こそは全量買い付けたいと願っていましたが、買付け量を125トン(同90トン)に制限し、品質管理強化の年としました。

収穫後のチェリー選別からパーチメント納品までの工程を4名の品質管理スタッフが18集落を回って確認しました。また、パーチメントから生豆出荷までの工程は委託をやめ、自前の加工場建設を決めました。2014年の出荷には加工場が間に合わなかったため、他団体の脱殻場を借り、手選別はディリ事務所の前庭にテントを張っておこないました。

COCAMAUでの一次加工から生豆出荷にいたるまでスタッフが品質管理に責任を負い、2015年1月に横浜の港に到着したコーヒー豆の品質は消費者の方々に喜んでいただいています。この経験をもとに2015年1月からディリに土地を借りてコーヒー加工場の建設を開始しています。完成は6月を予定しています。

また、ソーシャルプレミアム資金でCOCAMAUはあらたに6集落へ生活用水を引く水事業を実施しています。ロブスタコーヒーを生産するサココ自立組合(KOHAR)は、コミュニティ114世帯の家修復、上水道設備修復、組合員4名へ奨学金を供与しました。組合活動がコーヒーの共同出荷から社会事業につながることにについて、KOHAR代表アマロさんは、「目先のことしか考えられなかった人がもっと広い考えを持てるようになった」と変化を喜んでいます。

(東ティモール事務所 伊藤淳子)



コーヒー豆の加工をモニタリングするスタッフ



建設が進むコーヒー豆の二次加工工場

COCAMAUのメンバー数の推移

村	集落	2011		2012		2013		2014	
		組合員	準組合員	組合員	準組合員	組合員	準組合員	組合員	準組合員
アイトット村	クロロ	18	27	19	26	25	26	27	25
	マウレフォ	11	17	19	16	8	16	11	16
	ベトゥララ	5	9	5	9	5	9	5	9
	ルスラウ					11		10	
マウベシ村	レポテロ	11	13	9	13	11	13	16	10
	リティマ	9	9	10	9	11	9	9	9
マネット村	ルスラウ	8		7		7		11	
	ハヒタリ	15		15		25		25	
	マウライ			36		68		68	
	レブルリ			15		24		25	
マウラウ村	ケリコリ			22		46		50	
	リタ	28		40		37		43	
	ルムルリ	33	23	42	23	41	23	44	22
	ハトゥカデ	24	8	24	9	26	9	37	9
エディ村	ハヒマウ							20	
	ロビボ	5	8	6	7	7	7	10	7
	タラレ			33		37		58	
ファトゥベシ村	ライメラ					41		46	
	テトゥバウリア					7		7	
組合員数計		167	114	302	112	437	112	522	107

KOHARのメンバー数の推移

ボニララ村	サココ	44	87	44	60	44	60	44	87
-------	-----	----	----	----	----	----	----	----	----

コーヒー生産者の声

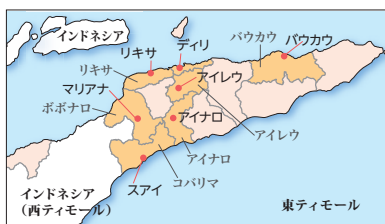


サココ自立組合(KOHAR) 組合長 アマロ・シルベイロ・サルシーニャさん

コミュニティの人びとと力を合わせ、ともに発展していきたいと思い組合活動を始めました。東ティモールは独立したばかりで、行政の計画は多いけれど動きは遅いです。ならばコミュニティからはじめるというオルタナティブは大切だと思いました。

オルタナティブな取り組みからもたらされる変化は、大変早いと感じています。組合をつくる前、ある人は粗末な家に住み、ある人は教育の機会に恵まれず、たくさんの課題がありました。以前自分で家を作るのできなかった人が、今は協同作業を通じて家を持てるようになりました。以前は目先のことしか考えられなかった人が、今はもっと広い考えを持てるようになりました。これはとても大切なことです。組合活動を始める前と比べると、経済的にも精神的にも変化が起きています。

2 農村女性による経済活動支援



ふりかけ作りをする女性たち



展示会で産品を販売しているようす

(この事業は、JICA草の根技術協力パートナー型の支援を受けて実施しました。)

2013年度から継続して、東ティモールの6県の村落の女性たちが地域の特産品を活用して収入を得られるようにすることを旨とする「東ティモール農村女性による経済活動支援」を実施しています。

2014年度は女性グループの製品の品質改善に努めてきました。例えば、バナナチップスの場合、揚げる時の温度を調節したり、スライスの厚さを一定にすることでサクサクとした食感になるようにするなど、何度も試作しました。さらに、メンバーの間では、小分けの袋詰めにして子どもたちが買えるような低価格で販売するなど、それぞれに工夫をこらしてきました。しかし、この「低価格」は、時として「赤字」につながるが多々あり、生産する女性たちのモチベーションが下がり、グループ活動が不活発になるという悪循環をもたらしていました。

そこで、一つの解決策として、地元で収穫できる自然資源を利用して「地元産品」を創ることにしました。例えば、ボボナロ県の場合、品質の高いピーナッツが豊富に収穫でき、各家庭の庭でも育てることができるので、コストを低く抑えることができます。ボボナロ県の4グループ全てを対象にボボナロ産のピーナッツを用いて「ピーナッツバター」の作り方の研修を行ったところ、風味が香ばしく、非常に美味しい製品ができました。女性たちの間でも大好評で、ピーナッツバター製造、販売の抱負を語り合っています。

今後、価格設定や生産量の決定、販売ルートの開拓等々、検討すべき課題は多々ありますが、2015年2月に女性グループの産品を披露しようと首都のディリで開催した展示会には多くの来場者があり、大いに盛り上がりました。参加した36人の女性グループのメンバーも楽しそうに商品の説明を行いました。来場者からは、ハチミツ、バージンココナッツオイル、ピーナッツバターが好評で、展示会の開始から早々に完売しました。今回の展示会を弾みに、引き続き女性たちとともに品質の高い商品の生産に取り組んでいきます。

(東ティモール事務所 伊藤淳子、西原京春)

活動する女性グループと産品

県	グループ名(日本語訳)	産品
アイナロ	Hanoi ba Oin (前向きに考えよう)	ハーブティー、ハチミツ、テンペ
アイレウ	Feto buka Moris (女性のいきがい探し)	チップス(カンナ、キャッサバ)
	Ismaik (イスマイク)	ハイビスカス(ハーブティー)
バウカウ	Hadomi Produutu Local (地域産品を愛する)	ココナッツオイル、ピーナッツバター
	Tuba Rai metin-OCA (オカの大地にしっかりと立つ)	チップス、ココナッツオイル
	Feto Iana Bele (イアナ集落の女性)	ピーナッツバター
	Feto Naroman (輝く女性)	イワシのトマトソース煮
	Rezedensia Wagia (ワギアの住民)	トマトソース、バナナチップス
ボボナロ	CTID/ Loja Liras (開発のためのトレーニングセンター)	ココナッツオイル、ふりかけ
	HAFOTI HAF (ティモール女性の支えになる活動)	バナナチップス、ココナッツオイル
	Hadomi Moris (生命を愛する)	チップス
	Masin Atabe (アタバエ塩生産グループ)	塩
	APAM (アパム [コードネーム])	チップス、ターメリック粉
リキサ	Haburas Tari Laran (タリの木の中で発展する)	チップス
	Moris Foun (新しい生活)	チップス
	Berumuttu (ベルムト [メンバー全員の頭文字])	ココナッツオイル、ピーナッツバター
コバリマ	Rammajeleju (ラメジェレージュ [メンバー全員の頭文字])	チップス
	Fitun Naroman (輝く星)	ふりかけ
	Feto oan Kiak (貧しい女性たち)	ふりかけ、チップス
	Mate restu (生き残り)	ごま生産



東ティモールの女性たち、テレビ出演!

6種のハーブからハーブティーを生産して家計の足しにしているマウベシ郡の女性たちと、地元の干し魚を使ってふりかけ作りに挑戦し始めたスアイ郡の女性たちが、2014年10月17日放送のNHKワールド『Asia Insight』に取り上げられました。ディレクターさんの質問に朗らかに答えるマウベシの女性たちの笑顔も、ふりかけ作りにテレビ取材が入って真剣なスアイの女性たちのまなざしも、ありのままの姿を映像に収めていただきました。

3 山間部農民の生計向上事業

「山間部農民の生計向上事業」は、東ティモールの社会経済状況に適合した森林保全型農業モデルの確立と農民の生計向上を目指して3年計画で実施しています。2014年9月から始まった最後の年度となる3年次は、土地肥沃度の改善、養豚・養蜂、バイオガスなどによる薪使用量の削減を事業の柱として実施しています。

【土地肥沃度の改善】 山間部マウベシの農地は傾斜が激しく、雨季の豪雨によって肥沃な表土が流されてしまいます。しかし、等高線に沿って平行に作物を栽培すると、表土の流出を防ぐことができます。さらに、生長が早く、根張りの良い木を等高線上に一定間隔で植えることで、土壌侵食をせき止め、10年ほどの期間で自然に少しずつ段々畑とすることができます。4集落から各5世帯の篤農家を募り、これら等高線栽培モデルの確立を進めています。農地の肥沃度を改善することで、農家の自給率を向上させるとともに、養豚飼料の増産にもつなげていきます。

【養豚】 養豚事業では、親豚購入のための小額資金を貸し付けた後、購入状況や飼育を巡回しながら確認・指導してきました。餌となるトウモロコシの収量向上のために肥料（鶏糞）を配布するなど、一番の課題である飼料の確保について取り組んでいます。親豚の栄養状態が少しずつ改善されてきたことで、子豚を手にする農家も出てきました。

【養蜂】 東ティモールではじめてとなるアジアミツバチの養蜂に取り組んで2年。木製の巣箱のほか、竹筒や丸太など様々な形の巣箱を試すなど、試行錯誤を続けてきました。地元の人びとの経験に学びながら、最大で16群まで飼育コロニーが増えました。しかし、乾季に入ると蜜源の花が少なくなり、半分以上の巣箱からミツバチが「家出」してしまいました。それでもいくつかのコロニーは巣箱に留まり、雨季のはじまりとともに蜜源が回復すると、コロニーがみるみる大きくなってきました。ハチミツの採取まであと一歩です。

【バイオガス】 バイオガスの活動地を新たに4集落広げ、今までに8集落で42基を設置しました。設置後1ヶ月ほどでガスが発生し、調理や湯沸しに用いています。スタッフが技術的側面を担い、設置世帯・グループメンバーとともにプラントの設置を進めています。プラントからは、ガスに加えて良質の液肥が副産物として手に入ります。この液肥を野菜栽培に利用する方法を、講習会や巡回指導を通じて伝えてきました。液肥を使った農家からは、「作物が元気に育ち、収穫が増えた」と、喜びの声を聞くことが出来ました。

（東ティモール事務所 高橋茂人、宮田尚史）

（この事業は日本NGO連携無償資金協力の助成を受けて実施しました。）



等高線栽培のワークショップ



生まれたばかりの子豚と母豚



巣箱に入ったアジアミツバチ



バイオガスプラントのようす

循環型農業事業（2012年7月～2015年8月）3年間事業の推移

事業開始以前の課題

1. 薪への依存が高い
2. 畑の収量が低い
3. 畜産技術がない

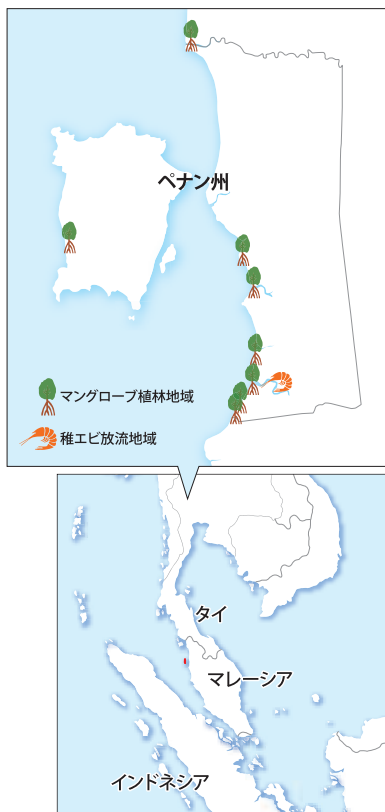
2012年度、2013年度の活動

- ロケットストーブの導入で薪の消費量の低下
- 豚の適切な肥育法を指導
- アジアミツバチの生態の把握と養蜂の開始
- バイオガスの設置

2014年度の活動

- 農地の土壌改善
- バイオガス導入農家の拡大
- 豚の肥育法の改善
- 養蜂と蜂蜜の採取による農家の収入向上

PIFWAと地域コミュニティの活動地域



PIFWAの植林教育センターに植えられたマングローブ



植林に訪れた地元の子どもたち

マレーシアでの活動の意義

パルシックがマレーシアで活動を始めて5年の年月が経ちました。マレーシアは中進国として発展しており、東ティモールやスリランカとは一人当たりGDPの金額などを見ても大きく異なっています。また、現地に日本人駐在員を置かず、東京からのスタッフが出張ベースで現地を訪問し、現地のカウンターパート団体のPIFWA (Penang Inshore Fishermen's Association ペナン浅海漁民福利協会) およびPIFWANITA (NITAは女性の意味) とやりとりして、事業の実施に協力してきたという点でも他の地域での活動とは異なります。

そもそも漁民組織PIFWAと出会ったのは、姉妹団体PARCが主宰する魚研究会でアジア各地の漁村を訪れたことがきっかけでした。これまでに多くの漁民団体と接してきましたが、漁民自らが地域の自然環境を取り戻すために植林活動を始めて、10年以上つづけているという例は非常に珍しく、ぜひこの活動を支援したいと思い、PIFWAの植林を支援する事業を開始しました。

活動をつづける中で、より多くの方々に植林に参加していただきたいの思いを強くし、毎年日本からの植林ツアーの開催を呼びかけてきました。今年は日本からのツアーを2度、ペナン在住日本人の方々を対象にしたツアーを1度開催し、参加された方々はPIFWA・PIFWANITAを訪問し、一緒に植林作業をしました(詳細は次頁、p.21)。

植林活動は、これまでパルシックを知らなかった方々にもつながれるきっかけになっているように感じています。マングローブの植林を通して、アジアでの開発問題と環境保全について日本の市民社会に伝えていくこと、パルシックが漁民組織PIFWAとマレーシアで植林を行う意義はここにもあります。

1 PIFWAの活動

2014年度もPIFWAの教育センターには、ボーイスカウトの子どもたちや中学生、マレーシア企業のCSR活動、海外のNGO、日本からのツアー参加者など、数々の訪問を受け入れました。中には一度に100人以上のボーイスカウトの子どもたちが訪れることもありました。

PIFWAはこれまでの取り組みから、国や州政府関係者からも一定の評価をされるようになり、漁業や環境に関する政策に関与する機会にもより多く参加できるようになっています。マレーシア国内の環境NGOが集まる会議に参加したり、他の漁協に住民主体による水域開発について話し合ったりと、環境問題にもより深く関わっています。

こうした会議等での経験を生かし、教育センターを訪れた人々がマングローブの植林を通して、開発や環境問題、漁業との関係などをより深く理解し、考えられるような環境教育の方法について今後、考え、実践していく必要があるとも考えています。

(植林事業は、イオン環境基金、りそなアジア・オセアニア財団、日本フィランソロピー協会の助成を受けて実施しました。)

2 女性グループ PIFANITA による食品加工事業

PIFWAメンバーの奥さんたちが集まって結成した女性グループの PIFWANITA (NITAは女性の意味) は今年度から本格的な活動を始めました。試行錯誤しながら、マングローブを利用した2種類の製品(ジャムとお茶)を商品化しつつあります。食品を取り扱うための衛生管理などの研修を受けたり、できあがった製品の栄養分析を依頼したり、パッキング方法やラベルのデザインについて考えたりと、これまで経験したことのない作業にも取り組み始めています。

最初は女性たち同志で集まる場を持ちたい、あるいは、副収入を得たいという素朴な目的意識から始めましたが、植林活動に参加することや、商品の開発のためのグループ内での話し合い、行政機関とのやりとりなどの様々な経験から、参加女性自身の中に社会性やリーダーシップが育ちつつあります。

なお、PIFANITAのジャムやお茶は、マングローブ植林に来た人たちに提供され、好評を得ています。

(大塚照代)

(食品加工事業は、味の素「食と健康」国際協力支援プログラムの助成を受けて実施しました。)



食品加工に取り組む PIFWANITA の女性たち



マングローブの実で作られたジャム

3 ペナンでのマングローブ植林ツアーの開催

ペナン在住日本人・子どもたちによる植林ツアーの実施

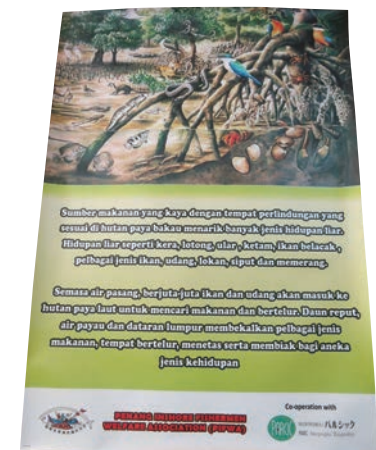
2014年9月14日、昨年につづいてマレーシアのペナン在住日本人の方々を対象にしたマングローブ植林ツアーを開催しました。ペナン日本人会やペナン日本人学校に広報でご協力いただいたおかげで、日本人学校の生徒さんとそのご家族10組、26名の方がご参加くださいました。初めてマングローブ林のぬかるみを歩いた未就学の子どもたちの中には、「泥が気持ち悪い」、「歩けない」と泣き出しそうになり、お父さん、お母さんが抱きかかえての移動となりましたが、小学生の子どもたちは元気に歩き、苗木を一本一本丁寧に植えてくれました。ツアーの後、参加されたお父さん、お母さんからはこんな感想をいただきました。「帰宅後の子どもたちの感想は『あんなネチョネチョの所へはもう行きたくない』というものでした。それでも貝やカニやハゼや猿を観察したことは強く印象に残っているようです。成長していく中で、地球規模のサイクルに気付くときが来るのでしょうか。』



ぬかるみを歩く子どもたち

マレーシア：企業のCSRへの協力

2014年12月5日から10日までの日程で環境省主催の「CSR担当者のための海外森林保全ツアー」が実施され、民間企業3社のCSR担当者がマレーシアを訪問し、ペナンでPIFWAと植林活動を行いました。企業の方々は、植林体験だけではなく、CSRとして植林活動に10年以上継続的に取り組むマレーシア企業やマングローブで木炭を作る日系の木炭工場、マレーシア政府の森林保全担当者なども訪問し、多面的にマングローブの保全活動を見聞されました。ツアー後の報告会では、日本企業がCSRとして植林活動にどのように関わっていけるかについての意見交換が行われました。パルシックは、同ツアーの現地での調整、案内などで実施団体の一般財団法人・地球人間環境フォーラムに協力しました。



PIFWAの植林教育センターに貼られたポスター

北上町の復興状況と住宅再建のこと



模型を見ながら、高台移転についての説明を聞く住民の方々



造成された土地



自力再建による住宅再建

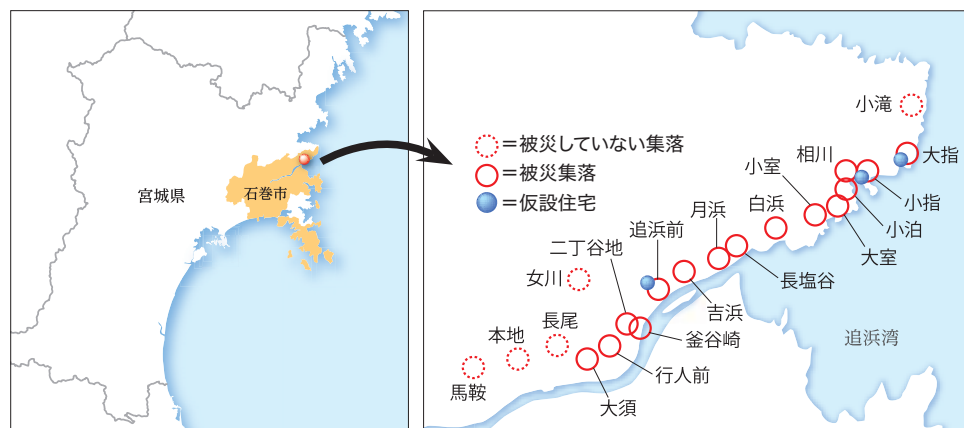
2011年3月11日の東日本大震災の発生から4年の年月が経過しました。パルシクが活動する石巻市北上町は、1955年に十三浜村と橋浦村が合併して北上村に、1966年に北上町となった地域で、2005年の「平成の大合併」で石巻市の一部となりました。東日本大震災前の人口は2,288人、このうち、地震による津波によって165人が死亡、80人が行方不明となりました。世帯としては672世帯のうち522世帯が家屋の全壊の被害にっています。

現在北上町では他の沿岸地域と同様、防災集団移転促進事業による高台移転地の造成工事が町内の各地区で進められています。しかし、造成団地全11カ所のうち現在までに住民への引き渡しが完了している団地は釜谷崎団地、小室団地、小指団地の3地区のみに留まり、未だ多くの住民が仮設住宅での生活を強いられています。

現在用地の買収は全造成地で完了し、各地伐採や土工事に着手が始まっていますが、一番遅く工事が完了する団地は平成28年度中といわれ、そこから各世帯の自力再建住宅や公営住宅の建設が完了するまでを考慮すると、新居での安定した生活を取り戻せるのは、平成29年度頃まで先になるといわれています。それでも、先の先行3地区の引き渡しにより新しい住宅が建ち始める様子は、北上町全体に希望をもたらす進捗であると言えます。これまで用地買収などを理由に工事が滞り、目に見える復興の姿を捉えられなかったため、気の滅入る方も少なくありませんでした。造成工事が進む様子を目で見て取れる今は、そこでの生活を想像することが最近の楽しみになっていると語ってくれる住民の方も現れ、住民に漂う雰囲気も変化が出てきているように思えます。

造成の工事がほぼ確定した地区が多く出てきたこともあり、年度終わりがらから住民の高台移転に関する関心事は『団地のどこにだれが住むか』となってきています。先駆けて計画が確定したにっこり地区では、それを決めるお手伝いをしました。来年度は他の地区でもこのことで話し合う機会が多くなると思われま。完成が見えるまでもうしばらくの辛抱が必要となりそうですが、その日が来るまでに住民の皆さんがいかにより良い新生活を迎えられるかについて、少しでもそのお手伝いをしていきたいと思ひます。(復興応援隊 遠藤博明)

宮城県石巻市北上町



にっこり農園3年目——へっこ市の開催——

3年目を迎えた新古里農園では、2014年度、農園休憩所の隣に増設した厨房を使って、農園で育てた野菜や北上産のお米、宮城名物牛タンメンチカツなどを盛り込んだ弁当を製造、販売し、にっこりサンパーク仮設団地で惣菜の販売をしたりしました。毎週金曜日の仮設団地での野菜・惣菜販売は、盆、正月と台風の3回を除いて休むことなく続けました。販売に来てくれる人の数はだんだん減ってきましたが、大雪の中「今日も売りさ、来たの？」と住宅から出てきてくれる常連さんもいます。

また、農園のイベント“へっこ市”を農園休憩所（冬季は仮設団地集会所）で開催しました。農園産野菜と焼きそばやおにぎり、惣菜などの販売のほか、毎年農園を訪問してくれるボランティア団体に協力してもらった日曜品や衣類のバザー、大道芸人や地元のシンガーソングライターのステージなどを行いました。“へっこ”は十三浜の言葉で「はいておいで」の意味です。仮設のおばあちゃんたちの“お出かけ”の機会となっているほか、仮設団地のお母さんたちが手伝いに来てくれたり、バザー用品の収集に協力してくれたりと、農園を訪れる人の輪が少しずつ広がってきています。（北上駐在員 西村陽子）

（にっこり農園の活動は、ジャパン・プラットフォーム「共に生きるファンド」の助成を受けて実施しています。）



仮設住宅での野菜・惣菜販売の様子



へっこ市で商品を手取る住民の方々

復興応援隊の活動

北上町で復興応援隊の活動を始めて、2年3か月が過ぎました。2014年度も昨年にひきつづき、宮城県から復興応援隊事業を受託し、地域に暮らす5人の応援隊員が①住宅移転・まちづくりの支援、②かわら版の発行、③子ども支援、④さまざまな地域のイベントのサポートを行ってきました。今年度は昨年度よりも一歩引いた形で住民さんが主体となって活動を行っていただけるよう、これから地域を担う20～40代の若手住民による住民組織の結成や、子供会の復活の支援なども行いました。復興とは何か、何を目指して活動を行うのか、ということを日々考え、地域の方々の話を聞き、話し合いながら、活動を進めてきました。



毎月発行している「かわら版」

2014年度の復興応援隊活動をふりかえって



北上春祭りでの白浜の獅子舞復活

今年度の一番印象深かった活動は、北上春祭りに、集落という枠を超えて地域の横の繋がりを作りたい、との思いで挑戦した白浜集落の獅子舞の復活です。

主な目的は白浜集落の獅子舞を復活させることでしたが、その復活を隣の浜の集落である大室のお祭りの席で果たせたのは異例中の異例のことでした。白浜集落の皆さんがそれを受け入れてくれるだろうか、と心配もしながら提案をしたところ、思っていた以上に反対意見はなく、復活を果たせました。震災後初ということで、住民の協力で約2か月間の練習をして挑んだ獅子舞の復活。集落の男性達の多くも大室まで足を運び、白浜の獅子舞で幕を開けた“北上春祭り”を笑顔で喜び、歓声が沸きました。迎えてくれた大室の皆さんに感謝し、浜と浜との新しい結びつきが出来たようで、本当に嬉しかったことを思い出します。

この経験は、どんな外部からの支援よりも地域の横の繋がりが地域力に直結する、と実感できるものでした。応援隊としての成果は何で測ることができるのかと日々考えていました。“応援隊に関わることによって住民がどう変わったか”だろうということ、を実体験として感じられた取り組みでした。

（復興応援隊 佐藤尚美）



パルシクのフェアトレード

パルシクは、生産者の方々が苦勞して作った産品をフェアトレード商品として輸入・販売しています。私たちは知恵を出し合い、経験を生かし、お互いの文化や背景を尊重しながら、フェアトレードを通して、持続可能な関係や暮らしを実現したいと考えています。

日ごろ意識せずに行っているお買いものが、環境破壊や貧富の格差等、社会の不均衡をもたらしている場合があります。フェアトレードの商品を通して、ふだん私たちが手にしている商品の背景、作っている人たちの暮らしを考えるきっかけを作る、ということもフェアトレードが果たす役割のひとつだと考えています。

2014年度は営業部門の事務局担当者が1名増え、2名体制になりました。販売管理、配送システムの合理化を図り、生産量が増えている大切な産品を、全量販売できるよう、営業を強化しました。



カフェ・ティモール

2014年度、東ティモールでは、より良い品質のコーヒーをつくれるよう“品質改善キャンペーン”を行いました。その甲斐あって、日本へ届けられたコーヒー生豆は形の揃ったきれいなものでした。東京事務所では、コーヒー焙煎屋を主とした既存・新規の取引先へ紹介しました。お客さんの反応は「美味しい」「印象が変わった」「スペシャルティコーヒーとして使える」などと嬉しいものでした。

一方で、急激な円安を受け、仕入の経費が増えたこと、2013年以前の在庫を十分に販売できなかったことで、在庫をたくさん抱えてしまいました。またコンテナ単位での大口販売が落ち込んだ結果、売上高は2013年度比の92%となりました。



アールグレイ紅茶

2013年4月から販売を開始したアールグレイ紅茶は「おいしい」「香りがやわらか」などと好評をいただいています。ツアーに参加してくれた方、スタッフの個人的な知り合いなどへ広がっていき、特に個人のお客様に多く購入していただきました。

初めての方には、まず知ってもらうことに重点を置き、イベントや出先でサンプルを配布し、購買へとつなげました。また、茶葉を原料として使用してもらえるよう営業しています。売上は2013年度比で、小売が約1.5倍になりましたが、原料販売が落ち込み、卸売は3分の1程度でした。



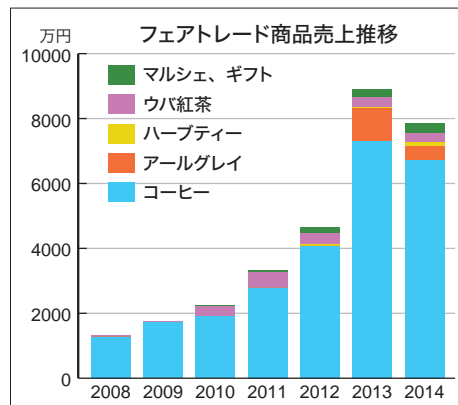
ウバ紅茶

パルシクのロングラン商品ともいえるウバ紅茶は、紅茶好きの方に特に好まれ、主に生協、個人のお客様を中心に安定した人気があります。



アロマ・ティモール

2015年2月から新しく「レモングラス」と「月桃」が加わり、アロマ・ティモールは全部で5種類のラインナップになりました。「レモングラス」は爽やかな香りが特長で、東ティモールでは風邪の予防にも使われてきました。「月桃」はほのかに優しい味わいで、体を内側から温めるといわれます。生産量が安定してきたことを受け、今年はハーブ専門店などで原料として使ってもらえるように、営業を開始しました。



フェアトレードの推進

2014年度はより広い範囲の人びとへ、フェアトレードの推進、理解を深めていただくことに努めました。

1つ目は、企業と連帯したフェアトレードの促進です。社食やオフィスコーヒーの原料提供と共に、パルシクの取組のポスターを掲示していただきました。2つ目は、事務所訪問の学生やセミナー、勉強会での発信をしました。FOODEXやデパートで展示会へ参加し、普段接するのとは違う層の方々へ、直接、商品を通したフェアトレードをお伝えすることができました。

ただ、企業への営業については十分に行えず、取引量は増えていません。多くの社会的企業やCSRを実施している企業にフェアトレード商品を取り入れて頂けるよう、そしてそこからその国や社会の背景についても知っていただけるよう営業を強化していきます。

●**企業のCSRと連動したフェアトレードの取り組み**…アールグレイ紅茶が「ソーシャルプロダクツアワード2014」を受賞したことでご縁ができた企業から、CSRの取り組みの一つとしてフェアトレード商品を社内販売する、という企画に声をかけていただきました。

昼食時に、社員食堂の一角でアールグレイ紅茶、コーヒー、リサイクルサリ一製品を販売し、生産地の写真パネルを使いながら、フェアトレードの背景、商品のおいしい理由を知っていただきました。まだまだフェアトレードという言葉が浸透していないことを実感し、今後も継続して取り組んでいきたいと思っています。



社内休憩スペースでの出張販売

●**“エシカルウェディング”の引き出物をご提案**…5月14日から20日まで、大阪の阪急うめだにて「ナデルのエシカルウェディング」に出展しました。「エシカルウェディング」とは、ドレスや小物、引き出物などに持続可能な商品を取り入れ、人や環境に配慮するという“エシカル（倫理的）”な結婚式のことです。パルシクの商品は、エシカルな引き出物として提案させていただき、スリランカ産のアールグレイ紅茶を中心に、多くの来場者にご紹介しました。



エシカルウェディングの特設コーナー

●**フェアトレードデーにパルシク・シネマカフェを開催**…映画を通じてパルシクの活動を紹介する企画『パルシクシネマカフェ Vol.2』を、世界フェアトレード・デー5月10日（土）に渋谷UPLINK FACTORYにて開催しました。

前半は東ティモール人女性を主人公に独立後の東ティモールの様子を描いた映画「ローザの旅」を上映し、後半は代表理事の井上礼子と、長年にわたってフェアトレード活動をされている長坂寿久さんが「フェアトレードから考えるコミュニティ」をテーマにお話しました。会場は若い方を中心に立ち見が出るほどの大盛況となり、フェアトレードや東ティモールへの理解を深めていただく良い機会となりました。



フェアトレードから考えるコミュニティについてお話しする長坂さん

●**大学の学園祭や授業でのフェアトレード商品の紹介**…大学の学園祭や授業でパルシクのフェアトレード事業や商品について、取り上げていただきました。各大学の学園祭には、学生さんだけでなく卒業生や高校生、親子連れ、ご父兄の皆様、近隣住民など、多くの人たちが訪れ、年齢・性別を問わず「フェアトレード」に興味をもっていただくきっかけになったようです。



甲南女子大学の学園祭に展示

2012年からの取り組みを応用した広報戦略

2014年度は、2012年度から取り組んできた広報の知識やツール、これまでの経験を応用して、支援の輪がより広がるように情報発信を行いました。



ParMarche (パルマルシェ)



パルシック Webサイト



パルシック Facebookページ



READYFORのチャレンジページ

●**オンラインショップのリニューアル**…2013年度より遅れ遅れになっていたオンラインショップのリニューアルですが、2015年1月ようやく『ParMarche (パルマルシェ)』という名前で新たにスタートしました。このショップ名の「par」は、「parcic」とフランス語で「わかちあう」を意味する「partage」から取り、「みんなでわかちあう市場」という意味が込められています。

商品パッケージの雰囲気にあわせた見やすく親しみやすいデザインへと変わり、充実した商品情報を掲載しています。また、サイトの使い方、パルシックの活動、フェアトレードについてなどの補足情報を増やしたことにより、ショップの信頼感がアップし、インターネット広告経由での新規のお客様が増えています。一方で、旧オンラインショップを愛用してくださっていた方が、新しいサイトになり使い勝手が変わったことにより、利用を躊躇されていることが徐々に見えてきました。既存のお客様をしっかりとサポートしながら、新規利用者を増やしていける運用を目指します。

オンラインショップ ParMarche (パルマルシェ)：<http://parmache.com>

●**WebサイトとSNSの連動した情報発信とメールマガジン発行**…民際協力・フェアトレードの各事業の情報発信として、WebサイトとSNS (Facebook、Twitter) に、定期的に最新情報を掲載しました。特に Facebook は、2012年の年末に利用を開始して以来、起こった出来事をリアルタイムで端的に投稿し続けることで、2015年2月時点では約720名までファンが増えました。パルシックの活動に興味をもってくださっている方々への簡単な情報発信ツールとして、とても役立っています。

●**クラウドファンディング READYFORでのチャレンジ**…クラウドファンディングとは、インターネットを介して不特定多数の個人から支援金を集めるサービスです。2014年6月から7月にかけて、スリランカ南部デニヤヤ事業の一部における支援金集めと、新しい支援者の獲得を目的として「スリランカの有機転換農家のためのコンポストセンターを作る！」と題したチャレンジを実施しました。60日間で80万円を集めるというこのチャレンジは、期間終了時点で支援金が1円満たないだけでも全て“チャラ”になってしまうという、とてもスリリングな仕組みでした。

そこで、会員や支援者の皆さま、フェアトレード商品のお客様などへ幅広く呼び掛け、おかげさまで856,000円 (達成率107%) を集めることができました。また、このチャレンジへの最高額 (10万円) のご寄付をいただいた2名には、12月のスタディーツアーにご参加いただきました。

チャレンジを達成する目的は果たせましたが、蓋を開けてみると、ご支援くださったのは大半がこれまでの支援者の方々ということが分かり、残念ながら新しい支援者の獲得にはつながらず、次回への課題が残るものとなりました。

●**淡路町マルシェ**…東京事務所の一角にある淡路町マルシェはオープンから2年半が経ちました。パルシックや近しい団体のフェアトレード商品や有機野菜等の販売を行っています。今年は姉妹団体パークの自由学校と連動して、有志が育てた無農薬米や自然農法で自家採取した種の販売も始めました。また、2月2日には、近くの淡路町駅／小川町駅近辺でバレンタインに向けたギフトの販売促進とマルシェの宣伝のために、チラシを配布しました。



淡路町マルシェ

●**国際協力ニュースの発行**…活動地の状況やパルシックの活動を会員、サポーターズ、寄付者、フェアトレード商品の購入者の方々にご紹介するニュースレター「国際協力ニュース」を6月と12月に発行しました。毎回発送作業には、多くのボランティアさんが参加してくださり、みなさんと楽しく作業できる時間になっています。



国際協力ニュース Vol.24、25

●**マーケティングボランティアの結成**…ボランティア活動を通じて、コーヒーや紅茶、フェアトレードについて継続的に学んでいきたいという方、将来カフェを開いてみたい方などを集め、マーケティングボランティアチームを結成しました。2回の座学とコーヒー・紅茶の淹れ方勉強会を経て、イベント準備から出店、片づけ、反省会、そして売上の集計と効果測定を行って、次のイベントへの効果的な出店へとつなげていく活動を行いました。

少しでもおいしいコーヒーや紅茶を提供したいと淹れ方を工夫したり、お客様へ積極的にPRして下さったりと、皆さん大活躍しています。



スリランカフェスティバルで紅茶とリサイクルサリーを販売

●**イベント出店**…2014年は主要な国際協力イベント、事業に関連するイベントを絞り込んで出店しました。イベントシーズン真っかきの春には、東京から一步も二歩も足を延ばして、福岡県久留米市のアースデイや、大阪の阪急うめだでの販売会に参加させていただきました。地方ならではの、地産地消や地元ネットワークを生かしたフェアトレードタウン運動の勢いを目の当たりにして、パルシックがフェアトレード活動を深めていくうえでのヒントを多くいただきました。



他団体のチョコやクッキーを取り入れた季節のギフト

●**季節のギフトセット**…母の日、父の日、お歳暮、バレンタインなど、季節のイベントに合わせてフェアトレード商品をセットにして販売しました。パルシックのオリジナル商品と他団体のフェアトレードのお菓子などをセットにし、インターネット広告との連動により、新規のお客さまからも、多数注文をいただきました。フェアトレードに関心のある層からギフトを贈っていただくことで、支援の輪が広がっていくことを期待しています。

2014年度
出店イベント

2014年	4月7日	ムジカ東北復興支援ライブ
	4月18日	久留米 アースデイちっこ
	5月10日	なんプロ フェアトレード・カフェ
	5月14日～20日	阪急うめだ エシカルウエディング
	5月31日	Gospel For Peace
	9月27日～28日	スリランカフェスティバル
	10月4日～5日	グローバルフェスタ
	10月19日	土と平和の祭典
	11月24日	下北沢あおぞらマルシェ
	12月14日	国際有機農業映画祭
	2月21日	高円寺 座の市
2015年	3月5日～6日	FOODEX JAPAN
	3月31日	千代田国際交流イベント



イベント後の打ち上げの様子

パルシック主催イベント

2014年5月10日	パルシックシネマカフェ Vol.2
2015年2月18日	緊急討論会 「大統領選挙とこれからのスリランカ」

人と暮らしに出会う旅

2014年度は、前年度までの「人と暮らしに出会う旅」の好評だった点・改善点を振り返り、より充実した内容になるよう見直しを行いました。その甲斐あってか、企画した全7回すべてのツアーが催行され、多くの方にツアーに参加していただきました。

どの旅も、参加者同士や現地の人びととの交流が深まり、充実して思い出に残る、とても楽しい旅となりました。

日本の皆さんに事業地を実際に訪問し、見聞していただくことは、事業地の状況やパルシクの活動を理解していただく上でとても大切なことだと考えています。今年度ご参加くださった方々の声を一部ご紹介します。



東ティモールエコツアー 大自然と食文化を巡る旅 (2014年5月4日～11日)

空がすんごく青かったり、見たことない植物や野菜がたくさんあったり、それが素朴でおいしかったり、海がきれいいで、星がきれいいで、住んでいる人もいい人多そうだったり、これからどんどん発展していきそうだし、可能性がありそうだし、今は貧しくてもこれから自立に向けて動いていきそうだったり、暑かったり、さわやかだったりしました。たまたま今の時代で、自分の今までの経験で、このタイミングで訪れて、とても新鮮でした。
(落合暢之さん)



石巻市北上町「出会い、学び、参加する旅！」

(第1回：2014年9月27日～28日)
(第2回：2014年11月1日～3日)

自分の目で見て感じ、耳で聞き、体験したことは、ツアー前の自分と後では全く異なるくらい大きな何かをいただきました。自然と共存し昔から伝わる制度に基づき、新しい試みに挑戦でいらっしゃる住民の皆様との交流は、3年の日々をいかに歩んで積み上げていらしたかが垣間見られ、かえってこちらがパワーをいただいたようです。まだまだ復興には時間がかかりますが、皆様と笑顔で交流でき、美味しいものをたくさんいただきました。(第2回参加者：古本雪路さん)



東ティモール 美味しいコーヒーに出会う旅 (2014年8月2日～8月9日)

東ティモールは、雄大な自然と人びとの生活が一体で、人が素朴で笑顔が素敵なこと、子どもが生き生きと子どもらしいこと、全体的に穏やかで悲惨な過去が感じられない平和な雰囲気等、とても魅力のある国だと思いました。少しでも力になりたく、妹のカフェでティモールのコーヒーやハーブを提供しています。日本人のエゴかもしれませんが、東ティモールの魅力がなるべく損なわれることなく、良い国づくりが進んでいくよう願っています。
(野久保佐智代さん)



スリランカ北部

少数民族・タミルの伝統文化に触れる旅 (2014年8月17日～8月24日)

ツアーに行く前は、スリランカはメディアを通して間接的に見聞きする位で、訪問したことはありませんでした。ジャフナ、ムライティブは、5年前まで長い内戦があったとは思えないくらいに平穏な雰囲気でしたが、要塞跡地を見学し、建物の銃弾跡を見つけ、人びとの体験談を聞くにつれ、内戦の存在とその爪痕を実感しました。スリランカの人びとは親切だがゆるく、文化の違いが面白かったです。食べ物はどれもおいしく、珍しい動植物も見られ、充実した旅を体験できました。
(林さん)



スリランカ南部ルフナ

有機紅茶をつくる人びとを訪ねる旅 (2014年12月25日～2015年1月2日)

一番の思い出は「茶摘み経験」です。時間はもちろんのこと、足元に張り付いてくる吸血ヒルのことを忘れてしまうほどに熱中し、完成した紅茶からは想像できない観葉植物のポトスに似た手触りのお茶の葉先を「一芯二葉、一芯二葉……」と、お題目のように1時間、摘んでからというもの、茶葉に大いなる愛着を持つようになりました。それからというものを追って訪ねた一次加工場、二次加工場、完成した紅茶のテイスティング、またオークション方法を教えて下さる場を見学し終えた頃には、紅茶を嫁に出す親のような気分にすらなっていました。
(石原里佳子さん)



マレーシア・ペナン

沿岸小漁民とマングローブを植える旅 (2014年12月25日～30日)

マングローブ植林作業は、結構ぬかるんで足を取られることも多々ありましたが、PIFWA・PIFWANITAの方と協力し、だいぶ奥の方まで植えに行くことができ、もっとできるかとも思いました。マングローブ林の見学・漁村の見学は、場所により、マングローブの種類も違っていました。開発の問題もあり、今後も漁業との関連を考えると植林を続けないといけないのだろうということを感じました。古い街、屋台、新しいビル、農村、工業地帯、人種、宗教とさまざまな面を持っているマレーシアを感じて帰ってきました。

(宇野つるみさん)



- 地下鉄 A5 出口から徒歩2分
都営新宿線・小川町/丸ノ内線・淡路町/千代田線・新御茶ノ水
※いずれの駅も地下でつながっています。
- JR・御茶ノ水駅、聖橋口から徒歩6分

特定非営利活動法人 パルシック



〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-7-11 東洋ビル

Tel : 03-3253-8990 Fax : 03-6206-8906

Email : office@parcic.org

Web : <http://www.parcic.org>

Twitter : http://twitter.com/parcic_office

Facebook : <http://www.facebook.com/parcic>